

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 白川 茜

### 論文題目

ハインリヒ・フォーゲラーの絵画における〈自然〉  
— 芸術家コロニー・ヴォルプスヴェーデの自然観との関連 —

### 論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	西川	智之
委 員	名古屋大学教授	越智	和弘
委 員	名古屋大学准教授	古田	香織
委 員	名古屋大学准教授	山口	庸子

## 本論文の概要

19世紀前半から1910年代あるいは20年代にかけて、北フランスを中心に、アルプス以北のヨーロッパ全域で、画家や彫刻家、あるいは詩人や文学者らによって芸術家コロニーが次々と設立された。芸術家コロニーとして分類されるグループは、成立した時期や規模などもまちまちであるが、その共通点として自然への意識が挙げられる。近代の産業化や機械化によるヨーロッパの社会体制の変化は、人々の生活のみならず、認識の変化をももたらした。そしてその意識変革の象徴として浮かび上がってきたものが、自然への関心であった。

芸術家コロニー・ヴォルプスヴェーデは、ドイツの芸術家コロニーの中で最も名の知られたもののひとつであるが、その創設者フリッツ・マッケンゼンとオットー・モーダーゾーンが、1889年に芸術家コロニーを作ったきっかけも、このブレーメン近郊の寒村の自然に魅了されたからであった。

1895年にこの芸術家コロニーの一員となったハインリヒ・フォーゲラーは、特殊な経緯をたどる画家である。ユーゲントシュティールの影響が強く見られる銅版画などのグラフィック作品で名声を得たフォーゲラーは、第一次世界大戦を経て共産主義活動にのめり込むようになり、自宅兼アトリエであったバルケンホフを改築し、自給自足を理想としたバルケンホフ・コミュニオンを設立する。そして当初の優美なユーゲントシュティールの作品は、単純な直線と幾何学的な図形を用いた表現主義的な絵画へと変化していく。

これまでフォーゲラーは、共産主義者としての画家という側面に焦点が当てられ、共産主義者となったという前提をもとに、帰納法的に論じられてきたきらいがあるが、本論文は、フォーゲラーの作品を一貫して貫く観点として、自然観を中心に据え、フォーゲラーのみならず、芸術家コロニーそのものの意義や歴史的、思想的な役割を解明しようと試みるものである。

本論文は、序章と終章を含め、全部で8章からなるが、以下本論部分にあたる第一章から第六章の概要を示す。

第一章ではヨーロッパの自然観がいかに変遷してきたか、そしてそれが芸術家コロニーの成立とどのような形でつながっているかが考察されている。絵画に表現される自然、すなわち風景画の歴史を振り返りながら、ヨーロッパにおける自然観が明らかにされる。とりわけ、芸術家コロニーの自然観に大きな影響を与えていると考えられるロマン主義の自然の捉え方を深く掘り下げながら、19世紀末のドイツの芸術家コロニーの自然観の特徴を明らかにする。バルビゾン派にならって、「森の内部へ」と進んでいき、自然の中で普遍的な超越的な自我を見出し、それを写し取ろうと努める一方で、ギリシャ・ローマ的ではないドイツ民族独自の、個別的な自我の根源としての北方の自然を採求するというアンビバレンツは、ドイツの芸術家コロニーの自然観の複雑さからきていると論じている。

第二章では芸術家コロニー・ヴォルプスヴェーデの創設の経緯と、創設者であるマッケンゼンとモーダーゾーン、そしてそこに加わるようになったフォーゲラー、パウラ・ベッカー、リルケを取り上げ、それぞれの芸術家たちがヴォルプスヴェーデの自然をどのようにとらえてい

たかを、かれらの作品や論評を使いながら論じている。他の芸術家たちと違い、ラファエル前派の影響が見られる初期フォーゲラーの作品では、自然が作品世界のイメージ上の自然へと変形されていると指摘する。しかし、ヴォルプスヴェーデに関するリルケの論評を挙げながら、それぞれのメンバーたちの自然観や作品での表現方法は異なっているが、自然への関心は共通で、自然を原初的な故郷とみなしている点では一致していると結論づけている。

第三章では、ドイツの芸術家コロニーと民族意識との結びつきについて論じられている。第一章では、芸術家コロニーの自然観へのロマン主義からの影響が論じられたが、ロマン主義からのもう一つの影響として、民族意識を挙げることができる。ヘルダーなどを引きながら、ドイツ民族の根源たる北方の古代文化へのロマン主義的な憧憬を指摘し、ユリウス・ラングベーンの『教育者としてのレンブラント』と19世紀末の「故郷芸術 Heimatkunst」との密接なつながりについて触れた後で、芸術家コロニー・ヴォルプスヴェーデの民族意識的要素について、マッケンゼンの作品などを例にしながら、具体的に論が進められている。この論文のテーマである自然と民族意識がどのように結びついていったかが明らかにされる。

第四章では、ハインリヒ・フォーゲラーを中心に、「流行」と「現代性」という観点から考察が進められる。フォーゲラーは、その時々々の時勢に敏感に反応し自身の作品の表現形式のあり方を模索した画家であったが、それはまさに産業化社会の中での芸術の姿を反映するものであった。フォーゲラーは、初期のユーゲントシュティールの絵画を出発点として、アーツ・アンド・クラフツ運動的な総合芸術の思想の下、ヴォルプスヴェーデに工房を造り、家の外装や内装、家具や食器などの日用品のデザインを手がけるなど、幅広い活動を行う。後年、フォーゲラーは、初期のこうした自分の芸術を「ロマン主義的な逃避」と呼んでいるが、フォーゲラーのみならず、マッケンゼンやモーダーゾーンもまた、社会変革の中で喪失した根源たる「故郷」を夢見たという点では同じであった。ヴォルプスヴェーデに集まった芸術家たちは、様々な表現形式でそれを表そうとしたが、そうした集団の意識こそ「現代性」であると結論づけている。

第五章では、マッケンゼンやモーダーゾーンが自然の中の神性をどのように表現したかを比較検討した後で、フォーゲラー作品の神性について論じている。フォーゲラーは、芸術家コロニーの一員として活動していた頃には、宗教的な主題を選ぶことはほとんどなかったが、1914年以降宗教的な色彩が目立つようになり、神あるいは神性というテーマと積極的に取り組むようになる。マルクス主義的な観点からは相反するものである共産主義と宗教信仰の作品内での混在に注目し、それについて検討を加えている。フォーゲラーにとって、「ここ」にはない「かなた」の理想の世界の追求という点では、芸術家コロニーの共同体と共産主義的コミュニンの理念は同じであり、フォーゲラーにとって共産主義に宗教的な救いを求めることはなんら矛盾することではない、共産主義転向後のフォーゲラーの作品は、芸術家コロニー・ヴォルプスヴェーデの芸術家たちの自然と神性に対するフォーゲラーのひとつの答えであると結論づけている。

第六章では、フォーゲラーの共産主義思想について、1919年に成立したバルケンホフ・コミューンを中心に、さらに詳しく論じながらフォーゲラーの自然観を問題とする。エッチング作品『生成 **Werden**』を中心に、フォーゲラー作品の女性像に焦点を絞り、フォーゲラーの自然観がさらに掘り下げられる。1920年代以降ドイツで展開されるナショナリズム的な自然観に基づいた父権制的な農民像に対し、フォーゲラーの描く女性像は、聖なる母性として象徴される自然からの生成を表現しており、原初的な生の表現である。自然の神性という目に見えない抽象的、概念的なものを、フォーゲラーは女性という可視的なものへ統一、融合しようとしたと結論づけている。

終章では、ヴォルプスヴェーデの自然観とフォーゲラーの作品と思想がどのように結びついてきたか、これまでの論をまとめ、また補遺として日本のフォーゲラー受容について紹介されている。

### 本論文の評価

本論文でも指摘されているように、これまでハインリヒ・フォーゲラーについては、共産主義思想に傾倒してからのフォーゲラーだけが強調されたり、ユージェント・シュティールの部分だけが取り上げられたりと、フォーゲラーという芸術家の全体像が描かれては来なかった。本論文は、フォーゲラーのそして芸術家コロニー・ヴォルプスヴェーデの芸術家たちの自然観を手がかりに、フォーゲラーという芸術家の全体像、そして当時のドイツの芸術家たちの芸術の共通点を探り出そうとする、意欲的な論文である。審査員からは、主に以下のような点で高い評価を得た。

ヨーロッパ思想の流れの中で、フォーゲラーやヴォルプスヴェーデの芸術家たちの自然の捉え方がうまく整理されており、納得の行く論理構成となっている。

また、フォーゲラーの作品解釈が秀逸で説得力があり、フォーゲラーの生涯全体から彼の芸術を解釈しようという試みも成功している。文章の流れも無理がなく、豊富な語彙を駆使しながら論を構成していく力は目を見はるものがある。

特に第六章での『生成 **Werden**』という作品の分析は、筆者のこれからの研究者としての発展を予想させるような独創性に富んでいる。

ただ、口述審査において、一次文献の読み込みが浅いと思われる部分、あるいは、まだ十分に消化できていない部分があるとの指摘もあったが、本論文全体の評価を損なうものではなく、それらの点については、今後の研究の展開に期待することとした。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が課程博士学位（文学）を授与するに値するものであると判断した。